

両親間葛藤のある青年の情緒的自律と適応の関連

浅井 拓人

(発達心理学研究室)

問題

両親間葛藤は青年の不適応につながるものが国内外の先行研究から明らかになっている (e.g., Davis & Cummings, 1994; Grych & Fincham, 1990; 川島他, 2008)。しかし、両親間葛藤場面において、全ての青年が不適応に陥るのだろうか。両親との間に適切な心理的距離を取ることができれば、不適応を回避することができるのではないだろうか。本研究では、両親間葛藤場面という文脈にさらされている青年において、情緒的自律が適応とどのように関連するのかを明らかにする。

情緒的自律 (emotional autonomy) とは、子どもじみた親への依存とその概念を放棄する個体化の過程を指す (Blos, 1979; Steinberg & Silverberg, 1986)。近年、情緒的自律は Separation と Detachment の 2 側面を用いて検討されている (Beyers, Goossens, Calster, & Duriez, 2005)。Separation は子どもらしい親の表象から離れ、自己と親を分離した個人として表現することである。親への脱理想化や非依存、親の意見や行動に倣わない、親と全ての秘密を共有しないことを含む。一方 Detachment は、親子関係に疎外感や不信感を感じ、親が自分を全く知らないことに不満を持つことである。Separation 及び Detachment と適応の関連を検討した研究では、Separation は内的・外的問題行動の双方に有意な相関が示されず、Detachment はどちらの問題行動にも有意な正の相関を示した (Jager, Yuen, Putnick, Hendricks, & Bornstein, 2015)。このように、情緒的自律の中でも特に Detachment の側面が不適応と関連していると考えられる。

先行研究ではこの情緒的自律と青年の適応について検討する際に、文脈 (context) を考慮する必要性が指摘されている (Fuhrman & Holmbeck, 1995)。本研究では、青年が生きる文脈の 1 つとして、家庭内での両親間葛藤に着目する。両親間葛藤は、「夫婦間における意見や主張の不一致による陰悪な状態」(東海林, 2006) と定義される。本研究では、両親間葛藤のある青年の情緒的自律と適応の関連を量的・質的手法を用いて検討する。

両親間葛藤と不適応の関連が示されている一方で、両親間葛藤に対する青年の態度の変化を明らかにする面接調査からは、両親間葛藤のある青年

において、Separation を成し遂げて適応的に成長する青年の存在が示唆された (浅井, 2017, 卒業論文)。つまり、両親間葛藤がある文脈とそれがない文脈とでは、情緒的自律は異なる役割を持っている可能性がある。

そこで本研究では、量的研究 (研究 1) と質的研究 (研究 2) の Mixed Method にて両親間葛藤のある青年の情緒的自律と適応の関連を検討する。研究 1 では、両親間葛藤場面において青年の情緒的自律と適応指標 (自尊感情, ソーシャルスキル) および不適応指標 (抑うつ, 両親間葛藤に対する恐れ, 自己非難, 巻き込まれ) がどのように関連するのかを量的に検討する。研究 2 では、研究 1 で明らかになった結果がなぜどのようにして生じたのかを、面接調査を用いて検討する。

研究 1

目的と仮説

両親間葛藤場面における青年の情緒的自律 (Separation・Detachment) と適応の関連を量的に検討する。情緒的自律と不適応指標の関連では、Separation は両親間葛藤のある青年で負の関連、Detachment は両親間葛藤に関係なく正の関連を示し、情緒的自律と適応指標の関連では、Separation は両親間葛藤のある青年で正の関連、Detachment は両親間葛藤に関係なく負の関連を示すと予測する。

方法

調査対象者 大学生 213 人 (女性 120 人), 平均年齢は 19.72 歳 ($SD = 1.31$) であった。

手続き 2018 年 10-11 月に自己記述式の質問紙調査を行った。尺度は以下の通りであった。①情緒的自律尺度 (Steinberg & Silverberg, 1986) の Separation (12 項目), Detachment (8 項目)。②両親間葛藤: 両親間葛藤認知尺度 (川島他, 2008) の葛藤の深刻さ (12 項目)。適応指標として、③自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) 10 項目, ④成人用ソーシャルスキル自己評価尺度 (相川・藤田, 2005) の関係開始, 解説, 主張性, 感情統制, 関係維持, 記号化の各 3 項目。不適応指標として、⑤抑うつ尺度 (島・鹿野・北村・浅井, 1985) 20 項目, ⑥両親間葛藤認知尺度 (川島他, 2008) の恐れ (5 項目), 自己非難 (3 項目), ⑦両親間葛藤への巻き込まれ

尺度(5項目)(川島他,2008)。尺度の α は .66-.87であった。⑧フェイス項目：年齢，性別，両親の結婚の状態。

結果と考察

両親間葛藤と情緒的自律が青年に及ぼす影響階層的重回帰分析を行なった。恐れと自己非難，巻き込まれ，抑うつ，自尊感情，ソーシャルスキルを目的変数とし，説明変数には Step 1 に両親間葛藤の深刻さと，Separation と Detachment をそれぞれ投入し，Step 2 でこれらの交互作用項を投入した。その結果，自己非難 ($\beta = .34, p < .01, \Delta R^2 = .02, p < .01$) と両親間葛藤への巻き込まれ ($\beta = -.27, p < .01, \Delta R^2 = .02, p < .01$) で葛藤の深刻さと Separation の交互作用が有意であった。

そこで，これらに対して単純傾斜の検定を行った。その結果，自己非難については，両親間葛藤の深刻さが高い場合に Separation と自己非難に有意な負の相関が示されたが ($\beta = -.35, p < .05$)，葛藤の深刻さが低い場合には関連は示されなかった。巻き込まれについても同様に，両親間葛藤の深刻さが高い場合に Separation と巻き込まれに有意な負の相関が示されたが ($\beta = -.28, p < .01$)，葛藤の深刻さが低い場合には関連は示されなかった。以上より仮説の一部が支持され，Separation について，両親間葛藤文脈における不適応指標との交互作用が見られた。よって，両親間葛藤のある青年において Separation が自己非難や両親間葛藤に巻き込まれることを防いでいることが示唆された。

研究 2

目的

研究 1 では，両親間葛藤という文脈において Separation を実現することが，どのようなプロセスで両親間葛藤による青年の不適応(自己非難と巻き込まれ)を緩衝したのかは明らかになっていない。そこで研究 2 では，この点について数値では現れなかった変化を青年の語りから明らかにし，両親間葛藤という文脈における青年の情緒的自律の発達について詳細に検討する。

方法

調査対象者 「両親間葛藤のある家庭の青年」を対象とした。両親間葛藤認知尺度(川島他,2008)の葛藤の深刻さ因子において上位 25%に含まれる青年を抽出し，うち 6 人に面接調査を実施した。

手続き 半構造化面接(1-2 時間程度)を行った。質問項目は①青年が経験した両親間葛藤，②両親間葛藤について感じたことや行ったこと，③両親間葛藤の自分への影響，④青年と両親の距離感，⑤情緒的自律のうち Separation，⑥情緒的自律のうち Detachment についての合計 6 つの質問項

目を使用した。

分析方法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(木下,2003)を使用した。

結果と考察

両親間葛藤という文脈の中で幼少期から大学生まで生きてきた青年の姿について，33 個の概念，12 個のサブカテゴリー，5 つのカテゴリーを生成した。

両親間葛藤のある青年は，両親間葛藤と両親のそれぞれに対する心理的距離を変化させていた。青年が【両親間葛藤に曝される】中で，<両親間葛藤に巻き込まれる>ことや<両親間葛藤によってネガティブな影響を受ける>，<両親間葛藤から逃れたい>と思うような心理的距離に近い様子から，[両親双方が悪いと思う]中で<両親間葛藤を反面教師にする>，一方で<両親間葛藤と上手につき合う>という【両親間葛藤を客観視できるようになる】，心理的距離が遠い様子へと向かっていた。

また，両親との心理的距離に近い【『親と子』の関係にとどまる】中では，青年は<両親との縦関係>と<両親との縦関係への対立>の両者を抱えていたが，両親に<対等に扱われる>ことや<両親を絶対視しなくなる>ことを通して【親との間に『人與人』との関係を構築する】姿が見られた。

さらに，この両親間葛藤と両親に対する心理的距離に近いことが【親との間に『人與人』の関係を構築する】きっかけとなり，【両親間葛藤を客観視できるようになる】ことにも繋がっていた。

また，研究 2 の参加者は全員が両親と離れて生活をしてきた。この青年と両親との物理的距離によって【物理的距離によって関係を捉えなおす】姿も見られた。

総合考察

本研究では両親間葛藤文脈における情緒的自律と適応の関連について，量的・質的な側面から検討を行った。その結果，特に Separation は青年が両親間葛藤における自己非難や巻き込まれることを防いでいることが量的研究，質的研究の両方から示唆された。

本研究では情緒的自律を検討する文脈として両親間葛藤を取り上げ，両親間葛藤の深刻さのみを指標として用いた。しかし，両親間葛藤の詳細な内容には多様性があることや，青年のきょうだいや周囲の大人といった，青年が利用可能な資産によっても青年の発達に影響があることが考えられる。今後はこれらの点についても考慮して検討を行う必要があると考えられる。

(主任指導教員：杉村 和美

副指導教員：森永 康子，杉村 伸一郎)